

# ●白州だより

2010年5月6日  
二十四節気 立夏  
発行 白州郷牧場  
山梨県北社市白州町横手 2259  
TEL : 0551-35-4520  
FAX : 0551-35-2970

白州郷牧場からの春のおたよりをお届けします！ <http://www.hakusyu.jp/> [info@hakusyu.jp](mailto:info@hakusyu.jp)



大雪で倒壊したハウス

## 「禍福あざなえる縄のごとし」

2010.3 椎名 盛男

今年の立春は2月4日でした。春節が2月14日ですから旧暦に従えば春は10日早いということになります。白州での農事の始まりは辛夷(こぶし)の花が咲いたときでした。私たちは辛夷の花を待つようにして春を迎えるのが慣わしでした。しかしやってきたのは春の、ドカ雪でした。ハウスは壊滅しました。起きてしまったことは変えられないし、これから起きることもヒトにはわからない。これも天意と思ってあきらめました。とんだ災難でしたが辛夷はもう隣の武川村までできています。今年は災害から

の復興からはじまりそうです。辛夷が咲くとスイセンやレンギョが続き、葉物の種まきが一齐に始まります。

今年はひどいエルニーニョで冷夏と予測する人が増えてきました。一筋縄ではいかない年になりそうです。

冷夏を前提に作付け計画を立てようと考えています。雨が多く冷たい夏になると慣行栽培はかなりの危機に立たされるでしょう。有機の農業は、冷害や、日照不足に耐えられるでしょうか。ハウスの倒壊、そして冷夏となると、相次ぐ試練にさらされることとなります。かといって、この地から逃避できるわけでもない。牧場が惨事からの復興の年になるよう努力していきます。

1月21～27日まで、ニューヨークへ行ってきました。昨年、妹がアメリカ人と結婚し、その生活っぷりを見に行くことと、長年の念願であったN.YでのLIVE演奏、そしてニューヨーカーの食事情等をリサーチできればと、かなり欲張りな旅となりました。

妹は夫とともに元気で暮らしているようで一安心、LIVEもソコソコのレスポンスをもらい満足し、いよいよ食事情チェックです。

まずは数日滞在してすぐに感じたのはあちこちで見る「生野菜」。街角のDEL(デリカッテセン:サンドイッチや持ち帰り用の西洋風惣菜を売る飲食店)を始め、レストランのメニュー、ステーキのつけあわせまで、妹に言わせると、ここ数年、ヨガやマクロビが流行、同時に野菜の消費が増えているとのこと。

ニューヨーカーのライフスタイルの一部に「野菜を食べる」がかなり浸透しているらしい。チリドックとチェリーコークで育っているアメリカ人像はもうニューヨークにはないみたいだった。しかも、特に中級クラスから上の家庭や若者は、週末になると車で1時間ぐらいの距離にある、郊外の農場を頻繁に訪れるそうだ。ほとんどの人がMY農場を持っているらしい。

そこで、その農場まで行ってみることにしました。

ちょうど土曜日に、マンハッタンから北に車で1時間ぐらい。東京からだだと、塩山・勝沼あたりの距離にある、Bloming hill "Organic" Farmへ。

(<http://bloominghillfarm.com/>)

下の写真は入り口に立ててある、「\$500の会費で、\$550の野菜をお届けします」という旨の看板。

農場のオーナーはGUY(ガイ)さん、日本のオーガニックファームから来ましたと話したら、時間を作ってくれて、色々話を聞くことができました。



ガイさんは日本の農家「福岡正信」が数十年前にアメリカに来たときに、その講演を聞いて、無農薬・無肥料の栽培に目覚めたとのこと。

彼の頭の中では、日本の農家のほとんどはオーガニックに違いないと言うような印象を持っているようだった。サムライはもういないし、そんなことはまるっきりないと話したら、渋い顔をしていました。

年間で数十種類の野菜をニューヨークやニュージャージー、いわゆる都市生活者の会員を募り、毎月300人の会員に直送している。その会員は1時間という短時間ドライブもあり、野菜を注文しつつ毎週のように来ては野菜を買っていくとのこと。

実際に農場には、決して大きくはないけどオーガニックレストラン、コーヒースタンド、中庭には綺麗な水が流れていて、そのまわりでのんびりコーヒー片手に談笑にふけることができるスペースがある。この農場は生産農場だけではなく都会人たちのオアシス、癒しの場所にもなっている。

この農場の野菜の出荷先は会員への直送だけではなく、マーケットにも出荷している。マーケットでもオーガニックは引く手あまたでよく売れるらしい。

実際、ニューヨークにあるオーガニックマーケット「ホールフーズマート」にも行きましたが、たくさんの野菜がぎっしりと並んでいて、買い物客も多かった。

野菜の出荷だけではなく、ニューヨークの名店のシェフを呼び、マクロビ料理を楽しむランチイベントや、料理教室なども開催している。これは会員向けのイベントで、1回に100人前後は集る。

そんなガイさんのオーガニックへの熱い思いは、ここでは書ききれないほど語られた。アメリカの慣行巨大農業を痛烈に批判し、日本の農法をこっぴどく恥ずかしくなるぐらいにベタ褒めする。

日本じゃまだまだ有機栽培はマイナーだと話したら、

全く信じていない感じだった。ただ抱えている問題や課題は同じ共感できる部分も多かった。アメリカでもオーガニックの規定や規制には大きな矛盾を抱えていて、日本と同じ、JAS 有機認証・有機農業推進法などの大きな矛盾点や問題点は、相通するものがあった。

レストランでは野菜たっぷりのオムレツ、自家製のライ麦を使ったパン、オーガニックアップルサイダー、オーガニックコーヒーをいただいた。正直食べる前は期待はしていなかった。野菜はともかく、料理になるとアメリカ人の食味には期待できないことが、僕には擦り込まれているからだ。しかしそれは擦りこみと言うか、疑心暗鬼な思いだけで、とても美味しくいただいた。食堂の女の子（たぶん娘？）も「大草原の小さな家」のローラのように、かわいかった。

野菜売り場では、冬場なのに、玉ねぎ、にんにく、グリーンリーフ、かぶ、ラディッシュ、特にリーキは美味しそうだった。スープにして欲しいと妹に頼み、購入したが実現せず、味わうことはできなかった。

客層は家族連れと若いカップルを中心に様々で、とても賑わっていた。50～60人ぐらいは常に人がいる状態だった。

ガイさんは丁寧にお客さん（おそらく常連さんなのであろう）と話をしたり、畑を案内したりと忙しそうだった。

しばらくして帰りの挨拶をしようとする、突然「ここでワサビは作れるか？」と聞かれ、気象状況や標高を聞くと、水も綺麗だし、なんとなく安曇野と似ているような気がしたので、「できると思うよ」と言うと、「今度来るときに株を持ってきて欲しい」と頼まれてしまった。

彼曰く「アメリカのわさびは、粉かチューブのワサビなんだよ」と、「日本人はいいよな、いつもフレッシュだろ？」と……。もう答るのも面倒になってしまった。「わさび」は映画のタイトルにもなっているし、とても

人気商品らしく、ましてやフレッシュのものなんてないから、のどから手が出るほど欲しいようだった。

また、日本のわさび農場の写真を見たらしく、わさびの花やわさびが栽培されている清流のまわりを、観光客が歩いている姿に感動したらしい。しっかりとビジネスも心得ているところがにくい。

「わさびは今度来るときにトライするよ、また日本の農業やっている人たちも連れて来たいし」と話すと、「おー、今度はそのにロッジができるから、是非泊まりに来てくれ」と、さらに「そのロッジでは・・・」と永遠に話は止まり様がなかった。



帰り道のハイウェイ沿いには、庭が広くて素敵な家がいっぱい並んでいた。妹の夫の話では、このあたりはNYへの通勤圏で、家を建てる人が増えているし、売家も増えているとのことだった。

「マンハッタンのマンションは「9.11」以降、もう流行らない、ニューヨークは自然派に変化して来ているのさ。」

妹夫婦も郊外に家を建てることを狙っているようだった。

夜は1人でホールフーズマーケットやレストランや飲み屋をはしごしてみたが、とにかく「ヘルシー」感が否めない。日本屋はどうかと思い、うどんやに入ってみることに。客のほとんどは日本人ではなく、外国人女性が髪をかきあげ、うどんをすすっている。

野菜の串揚げやサラダなど、メニューもヘルシー志向だった。チルドックとチェリーコークはどこにもない。数年前に来たときに食べた時に比べると、野菜、特に生野菜は、少しだけ味が濃くなっているようにも感じた。山盛りのグリーンピースやマッシュポテト、缶詰のますいほうれん草には一度も出会わなかった。

ベジタリアンも異常に増えているらしい。東京はどうかだろうかとぼんやり考えながら夜はふけていく。

その日は疲れ果てたのと時差ぼけで、翌日の夜まで眠ってしまった。

## 2010年の抱負

### 牧場スタッフ

経済は真っ逆様に落ちて行くというニュースなどはもう耳にタコができるくらいです。

どのように落ちて行くのか、その落ち方すら予想がつかえません。

いっそのこと、一気に消えてなくなるくらい落ちるなら、不安も消えるのにと考えたりもします。

今年だけとは限りませんが、「農」の持つ可能性にできる限り挑戦していきたいと思います。

栽培技術向上、販売先と物流の開拓と確保、環境の維持、これらは基本的に日々のルーチンと考え、その他に「農」が持つ力の可能性を追求したいと思っています。

教育、文化、食との関わりの中で、いかに人との関わりを大切に、その関係を育てて行けるのか。

そんなことを考えながら、今年も爆走したいと思いません。

(秋山澄兄)

野菜が売れない時代になる。厳しい事態になる。

今年初めのミーティングや、取引先の交流会で身をもって感じます。では、一体目標にするのはなんだろう。ただ有機で野菜を作っていればいいのか。

先日参加した交流会で、産直を「モノ」ベースではなく「ヒト」ベースで捉えて考え、行動するススメの講演を聞きました。現実の現場ではそれが全てとはいかないけど、日々のヒントとして頭に留めておこうと思いました。

例えば自分が本やCDを買うとき、それを作った人をまずチェックする。この人が作ったものなら面白いだろうと、入り口がヒトから始まる。

それと同じように、ここの野菜はイイ!この人たちが作ったものなら食べたい!(大げさ?)と思ってもらえるようになりたいです。

ここの農場は自然に恵まれていて、毎日居ると大自然があたりまえすぎて、何をどう伝えるか分からなくなるときがあります。でも、生協の人参は味が濃すぎて好きではない人や、なぜスーパーの卵より白州の卵のほうが値段が高いのかわからない人もおられるのも現実で、自分たちは「産直慣れ」してしまっただけで、食べてくれている人たちのことを何も知らなかったんだなあと思いました。そして、伝えることって山のようにあるんだと。

だから、今年は今一度自分たちの農場をよく見て、「発信する」ことが目標です。

現場のメンバーは少人数で、上司も部下も仲間同士では発生していません。良くも悪くも微妙な関係です。今年も大変で忙しいですが、おおらかにリラックスして仲間同士でも「発信」し合えたらもっと楽しくなりそうです。

発信で発信...

(坂田裕美)

今年から白州郷牧場が法人化をして新たな組織となって動き出しました。しかし、さしあたって内部での業務には特に変化もなく仕事をしていました。

でも、それは自分自身が内部の業務にしか目が届かずにいたのかもしれない。外側から自分たちを見てみると実はその社会的な立場というのは以前と大きく変わってきたのだと思います。

今では行政と連携した有機農業の推進や地域の子供に対する食育などといったことが始まりつつあるということですが、今までやってきたキララの活動に新たに興味を持ち共感してくれる人たちもいて、そういった意味で今まで以上に社会貢献できる立場に自分たちがいるということは白州郷牧場で働く一員としても有意義なものであります。

社会的に開かれた農場であるということを実感しつつ、誰が見ても綺麗な農場を目指していきたいと思えます。

(新谷知大)

2010年の抱負を三つにまとめてみた。

#### ① 去年よりもうまく野菜をつくる

去年の今頃もまったく同じことを考えていたのだが、「うまくいかねえなあ」と思うことが多々あった。自然を相手にしているのだから、思い通りにならなくて当然なのだが、今年こそはもっとうまくやっつけたいという気がするのだ。具体的な改善点でいうと、堆肥を散布した畑に生物活性水をじゃぶじゃぶとまいている。あとは資材の管理を徹底していきたい。どこになにかがあるべきか、共通の認識を持つことが課題だと思う。

#### ② キララの学校にもっとコミットする

今年の春の学校では特別な手応えのようなものを感じ

ることができた。多様な生き物たちが織り成す自然。その自然を損なうことなく恵みを受けとる生活の知恵。生き物たちのゆるやかなつながり。そういったものが漠然とだが、プログラム全体を支えるテーマとして浮かび上がっていた。ここで得た手応えを、今後のキララの学校で活かしていきたい。

### ③書きながら考える

ものを書く人は明確な主義・主張をもっていなければならない、と思い込んでいたのだが、必ずしもそうではないらしい。何らかのアイデアを表現するために書くのではなく、アイデアを形づくるために書く。そういうのもありなんじゃないかと思い、この「白州便り」で村上春樹について書きはじめた。どこに行き着くのかはわからないが、このやり方を継続していきたいと思う。

(内藤光)

## ひよこを育てて

土橋 貴法

初めまして。研修生の土橋貴法です。

自分は今年の2月2日から500羽のひよこの世話をしています。最初は楽しみにしていましたが、正直に言うと「自分で大丈夫なのか?」、「健康な鶏に育てられるのか?」とても心配でした。

自分は去年もひよこの世話をしていますが、そのときはスタッフの方々に手とり足とり教えてもらい健康な鶏に育てることができましたが、今年は2回目なので、最低減のことだけを教えてもらいそれ以外は自分の判断でやることになりました。

最初に来た時のひよこは自分の握り拳より小さくとても可愛らしく、そのひよこたちを1羽1羽優しく手に取り鶏舎に離してあげました。離れた瞬間にみんな元気よく走りまわっていました。その時からひよこたちがいろんなはじめての経験をするのです。

自分はひよこの気持ちはわかりませんが、知らないここに連れてこられて怖い思いをしたと思います、でも広いところで走り回れるし友達がいるなどの楽しいこともあったと思います。

その時のひよこ達を見て、「みんな健康な鶏にしてあげたい」と思いました。

でも思うだけなら簡単で、実際はとても大変でした。朝昼夕の餌やりに、2月はまだ寒くひよこ達が寒さに耐えられないず1か所に固まってしまっていて圧死してしまうので、ガスで火をつけていて温度調整をしていました。

温度調整は朝昼夕だけではなく鶏舎の近くを通ったら見に行ったり、寝る前に行ったりととても心配で大変でした。

でも1番心配だったのは、ネズミの存在でした、その時の、ひよこはネズミより小さいのでネズミの餌にされてしまうのです。スタッフの方から話を聞いたんですが、前は1回ネズミが来て100羽以上のひよこ



が噛み殺され、巢の中に引きずり込まれてたそうです。そんなことにならないように、ネズミ取りの罠を仕掛けたり、夜は何回か見回りに行ったりしています。それで今はネズミの被害はないのでよかったです。

今ひよこ達は、いっぱい餌を食べ、白州のミネラルたっぷりの水を飲み、ホウレンソウやサンチュなどのりよくじを食べて、ぐんぐん成長しています。まだ卵を産むのはまだまだ先ですが、これからも一所懸命がんばって育てていきます。

自分たちががんばって育てた鶏が産む卵を食べてみてください。

## 「翻訳夜話」(文春新書)

村上 春樹, 柴田 元幸(著)



村上春樹の最新長編小説「1Q84」に出てくる主人公の一人、天吾。彼は文章を書くのが好きで小説家を志している。文章のセンスはいいのだが、何を書けばいいのかがつかみきれないまま、塾の講師をして生計を立てている。彼の中から物語が湧きあがって

こないのだ。そんな彼に切れ者の編集者である小松が、『空気さなぎ』という小説の書き直しを提案する。「ふかえり」という謎の少女によって書かれたこの物語に二人とも惹きつけられるのだが、文章がお粗末で世間に発表できたものではない。そこで、この作品の文章を天吾が技術的に磨き上げて芥川賞をねらう、という計画を小松が提案するところから「1Q84」ははじまる。

天吾が『空気さなぎ』の書き直しに没頭する場面がおもしろい。それまでの天吾は、なにをするにも受身の立場ばかりをとる。小松の計画に乗り気にはなれないのだが、だからといってきっぱりと断ることもできず、終始振り回されっぱなしでいる。女性関係においても同様で、若くて澁刺とした女の子よりも、自分がリードする必要のない年上の女性という方が彼は落ち着ける人間なのだ。

弱気で内気なキャラクター、というわけではない。頭は切れるし、柔道で鍛え上げたたくましい身体ももちあわせている。しかし、過去の出来事に足をとられて、自分からどこにも足を踏み出せなくなっている。現在の自分を説明するために過去へ過去へと遡っていくしかなくなっていて、どうにも自力で前に進めないようなのだ。だから、知らず知らずのうちに受身の立場にまわってしまう。

しかし『空気さなぎ』の書き直しをはじめると天吾は豹変する。「すべてを一任された腕のいい大工」となっ

て足りないものを書き足し、余計なものを削っていく。「スタンリー・キューブリックの映画『突撃』の冒頭シーンで、将軍が塹壕陣地を視察してまわるように」書き直した文章をチェックする。「餌を求めて空を舞う鳥の鋭い集中力を持ち、水を運搬する口バのごとく忍耐強く」天吾は書き直し作業を進めていく。この場面で天吾は一時的にだが、受身の立場から脱却している。

ここでふと考える。この書き直しに没頭する天吾は、まさに翻訳に没頭している作者自身(村上春樹)と重なっているのではないか。そう思わせるくらい書き直しの場面の描写には力がこもっている。光景としては地味なデスクワークでしかないはずなのだが、多彩な比喩にいろどられて疾走感あふれる場面に仕上げられている。

村上春樹は小説家としては例外的に多くの翻訳を世に出している。フィッツジェラルド、チャンドラー、カポーティ、カーヴァーなどなど、古典作品から未翻訳のまま埋もれていた作品まで、である。実際に数えたわけではないが、村上春樹自身が書いた全作品(小説、エッセイ、紀行文)よりも、翻訳してきた作品の数の方が多いのではないだろうか。村上春樹が自ら認めていることなのだが、翻訳をやるよりは自前の作品を書くほうが儲かる。翻訳は決して簡単な作業ではないし、翻訳者としての責任も負わなければならない。そしてその見返りは決して多くはないという。それにも関わらず、彼は翻訳にのめりこんでしまうのである。なぜだろうか。もしかしたらここに村上春樹の小説世界を解く鍵があるのかもしれない。

というわけで今回は村上春樹と柴田元幸の共著、「翻訳夜話」をとりあげる。柴田元幸は英文学の研究者であると同時に数々の翻訳をしてきたプロ中のプロである。村上春樹の翻訳をチェックしてきたのもこの人である。

本書「翻訳夜話」をはじめて読んだとき、「へー、翻訳家ってのはこういうお仕事なのかぁ」と翻訳小説の舞台裏を見させてもらったみたいで面白かった。翻訳家を目指す若い人々との質疑応答という構成になっていて、彼・彼女たちの疑問や悩みに村上春樹と柴田元幸がずばずばと答えていく。とはいっても、わかりやすい解答ではない。

そもそも翻訳には正解というものがない。二人の翻訳者が同じ作品を訳しても、全く同じ訳文が出てくるなんていうことは、まずない。本書において村上と柴田それぞれがポール・オースターの短編、「オーギー・レンのクリスマスストーリー」を翻訳しているのだが、その書き出しを見比べてみよう。

### 村上訳

僕はこの話をオーギー・レンから聞いた。この話の中でオーギーの役まわりはあまりぱっとしたものではないので、というか少なくとも本人はそう思っているのだから、書くときには本名を伏せてもらいたいと彼に頼まれた。それを別にすれば、ここに書かれていることは、彼が話したとおりそのままである。落とした財布のことも、盲目の女のことも、クリスマスディナーのことも。

### 柴田訳

私はこの話をオーギー・レンから聞いた。オーギーはこの話の中で、あまりいい役を演じていない。少なくとも、オーギー本人にとって願ってもない役柄とは言いがたい。そんなわけでオーギーからは、俺の本名は出さないでくれよな、と頼まれている。それをべつにすれば、落ちていた財布のことも、盲目の女性のことも、クリスマスディナーのことも、すべて彼が私に話してくれたとおりである。

まず気がつくのが、英語の「I」を村上は「僕」、柴田は「私」と訳している。異なるのは語彙や言い回しだけではない。オースターによる原文では、この書き出しの一段落は三つの文で書かれている。村上訳では原文どおりに三つの文になっているのだが、それに対して柴田訳では一段落が五つに分解されている。おまけに柴田は「俺の本名は出さないでくれよな」と口語表現まで使っている。どちらかというと村上訳の方が逐語訳的で、柴田訳の方が意識的な仕上がりになっている。

一つの英文を日本語に置き換えるだけでも、そこには常に複数の選択肢がある。だから翻訳者の嗜好性や癖は嫌でも翻訳小説に反映されてくる。とはいっても、翻訳者が好き勝手していい、という訳ではない。二人とも、翻訳者は黒子役に徹するべきだ、ということを何度も強調している。翻訳者の使命は自己表現でも創作でもない。あくまで原文があって、翻訳者はその原文が表現しようとしていることを忠実に翻訳するべきであり、ただ単に

美しい日本語で表現すればいいのではない。ゴツゴツした感触をもつテキストを、滑らかな日本語に置き換えるのは決してよい翻訳とはいえないのだという。

村上も柴田も、聴衆（学生や若い翻訳家）に対して「あーしなさい、こーしなさい」というアドバイスは与えない。彼らが説こうとしているのは翻訳のルールではないのだ。だから生真面目に本書を読んでいるとだんだん頭がこんがらがってくるのだが、一貫して強調しているのは、「原文となる小説において作者が何を表現しようとしているのかを丹念に汲み取りなさい」ということである。翻訳の対象となるテキストに意識を集中させていれば答えは自ずとでてくるはずであり、それが全てなのだという。

村上春樹にとって翻訳とは、「もっとも効率の悪い読書」なのだ。翻訳家になる以前から、村上春樹はフィッツジェラルドやカポーティの作品を読んで胸をえぐられるような経験をしてきた。まずそうした衝撃的な読書体験があり、その延長線上で彼は翻訳にとりくみはじめたのだ。読書の一環として翻訳にまでいってしまうとはやりすぎだと思うが、翻訳学校の生徒たちに村上春樹はこう語っている。

「英語に『他人の靴に自分の足を入れてみる』という表現がありますよね。実際に他人の身になってみるということなんだけど、翻訳って、いうなればそれと同じです。」

小説を読んでも、文章を目で追って頭で考えるだけでは理解できない何かがときとしてあるという。そういうときは実際に「足を入れてみる」しかない。つまり物理的に手を動かして書いてみることにによって始めて、「物語の魂のようなもの」が肉体的に染みこんでくることがあるのだという。その実感が村上春樹を翻訳へと駆り立てているに違いない。

村上春樹は過去に読んだ小説から得た感動をととても大切にしているのだと思う。だからこそ、ここまで翻訳に夢中になれるのだ。村上春樹ほど、物語が人の心を強く揺さぶることを強く確信している人は他にいないと思う。その確信がなければ、物語を創作する小説家という立場と、忠実な読者という翻訳者としての立場を無理なく両立させることはできないだろう。そしてその確信こそが「1Q84」のテーマになっているのではないか。『空気さなぎ』という奇妙な物語の翻訳をした天吾はどうなっていくのか、興味のある方はぜひ「1Q84」を読んでみてください。

(読者：内藤光)

## 「半農半X」について 井上 忠彦

白州郷牧場の椎名代表に勧められて、今年からわたしは「半農半X」的な生活をはじめようとしています。

「半農半X」とは、「兼業で農に関わる」という意味だと思っていたのですが、調べてみると、塩見直紀氏が90年代から使いはじめた造語で、「X」とは、生きがい、出会い、交流、自分探し、多様性などを表現しているのだそうです。が、私の場合、白州郷牧場で行われているプロの農業技術や経験を勉強させていただいて、やや広い面積の土地で試してみるという、とても恵まれた環境で行う家庭菜園というのが正確なところですよ。

5月3日に、椎名さん見田さんに教えていただいて、枝豆、オクラ、ゴーヤ、落花生などの苗づくりをしました。枝豆とオクラは、数日で順調に芽が出始めました。

さて、リーマンショック以降、世界規模の金融不安が続いています。5月現在、ギリシャの財政破綻が、EU全体に拡大するのではないかと懸念されています。

そんな中、わたしは「半農半X」を「個人と世界とのバランスの取り方の模索」という風にとらえるようになりました。三浦雅士氏の「ニヒリズムとしての現代芸術」に、こんな文章があります。

「芸術は芸術であることによって価値があるという言説は、ほんとうは意味をもっていない。人間は人間であることによって価値があるという言説と同じように意味がない。基本的な人権は基盤をもたない信仰である。そこには根源的な不安が潜んでいる——不安のない信仰が存在しないように。

貨幣にしても同じだ。貨幣は貨幣であることによって価値があるというだけでは、人は不安に襲われる。紙幣がはじめは兌換(だかん)紙幣、すなわちつねに金に換えられうることによって価値を保証されていたことからも、人間の心理のありようは明らかだ。ドルにしても長く兌換紙幣だった。金本位制、つまり金という外部によって支えられていたのである。金との交換が停止されたのは二十世紀もなかばをすぎてからにすぎない。だが、停止されたにもかかわらずドルは、基軸通貨としていまも通用しつづけている。ドルはドルであることに

よって価値があるという状況がつづいている。金融危機が露わにしたのはこの仕組みの不安定性である。」

そして文章は「貨幣はたまたまみんながそう思い込んでいるから価値があるにすぎない。」と続きます。

お金がただの紙切れにすぎないことは、誰でも知っています。でもその上で、お金はお金であることによってモノやサービスとの交換価値がある、と考える社会にわたしたちはいます。

しかし「X」は「X」であることによって価値がある、ということは本当は根拠がなく意味を持ちません。世界の意味は世界の外にしかなく、ひとつの系は違う系との関係性の中で支えられて、やっと意味を持ちます。たとえば、自分探しといいますが、「自分」の意味は「他者」との関係性の中にしかありません。

お金＝貨幣をなりたたせているのは、交換される対象との関係性、価値と信用の仕組みです。貨幣経済とは、つきつめていけば、自分と世界との関係性にまつわる問題です。今起こっている金融不安は、いったいどう生きたらいいのか、価値の根拠をみつけられなくなった現代人の、精神の不安定性を示す象徴的な事象だといえないでしょうか。



枝豆の芽 (5月10日)

しかし、たとえば「農」は「X」という外部によって支えられる、「X」は「農」という外部によって支えられる、そういう構造のなかで生活すれば、生きていくうえでの根拠をみつけやすくなるかもしれないとわたしは思いはじめました。複数の系に属し、その関係性を相互に行き来するなかで、人間の不安定な心理が支えられ、自分と世界とのバランスが保ちやすくなるかもしれない。あるいは、なにかヒントのようなものが得られるかもしれない……

そもそも「百姓」という言葉は、「百の仕事」を意味するもので、農を含めた複数の系を自在に行き来するという生業だったはずですよ。たとえば、もしも江戸時代にコンピューターが発明されていたら、百の仕事のなかにコンピュータープログラミングも含まれていたのはまちがいないでしょう……

…と、さて、そんな小難しい理屈はともかく、わたしが苗床に蒔いた種は着々と芽を出し始めているのです。今後、苗の定植以降については、追って、白州HPよりリンクされた「半農半Xブログ」にてご報告いたします。